

洋画家・石井柏亭と足立の近代美術 1P 機械化以前の菓子づくりの道具 2P
 須賀家旧蔵 奉納算額について 3P 千住警衛と天狗党の乱① 4P

足立史談

第573号

2015年11月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (27-308)

洋画家・石井柏亭と足立の近代美術

小林 優

近年の調査により、足立の地が絵師（画家）・文人をはじめとする多くの文化人たちを支え、江戸時代以来、連綿と文学・芸術文化を展開させてきた豊穡なる文芸の街としての側面を持つていたことが明らかになってきました。

さらに、本年より開始された文化遺産調査の対象

一つとして、与謝野鉄幹・晶子夫妻を支えた詩人であり、洋画家・石井柏亭に学んで画家としても活躍した足立区花畑の詩画人・千ヶ崎悌六（ちがさき いてろく、一九〇五～六〇）の活動に対する調査を開始したことで、足立の芸術文化史をめぐる調査研究の視野は、江戸・明治を超えて昭和にまで広がりを見せることとなったのです。

そして、この悌六氏の活動に対す



石井 柏亭 《樅図》
 紙本墨画淡彩 制作年代不詳

る調査のきっかけとなったのが、彼の調査の師・石井柏亭の筆による《樅図》（左）が確認されたことでした。今回は、この《樅図》を通して足立との関係が明らかになった洋画家・石井柏亭についてご紹介します。

■近代洋画の重鎮・石井柏亭 石井柏亭（いしい はくてい、一八八二～一九五八）は、東京下谷仲御徒町（現・台東区上野）の生まれ。本名を満吉といい、祖父は江戸後期の絵師・谷文晁に師事した鈴木鷺湖（すぎきがこ）、父の石井鼎湖（いしいていこ）も鷺湖に学んで日本画家として活動しました。

柏亭もまた、幼少から父に日本画の指導を受け、一〇歳にして日本美術協会などに作品を出展する早熟ぶりを見せています。一六歳で洋画家・浅井忠に師事して以降は、洋画技法の習得に心血を注ぎ、日本画、水彩画、水彩画を横断する多彩な活動を展開して、画壇に独自の地位を築い

ていきました。

さらに、二科会（大正三年に文部省美術展覧会の審査に反発した洋画家たちによって結成された美術団体）をはじめ、多くの美術団体の創立・運営の中核を担い、組織運営にも優れた手腕を発揮した他、与謝野鉄幹・晶子夫妻の主宰する文芸雑誌『明星』、『冬柏』に挿絵や詩歌、時評を次々と発表するなど、文芸活動にも高い関心を示し、明治から昭和に渡る近代芸術文化の形成と発展に、幅広い功績を残しました。

■石井柏亭と画題としての「千住川」 画家として、国内外の様々な地域を写生して歩き、画題とした柏亭ですが、特に日本画家・平福百穂（ひらふくひやくすい）、結城素明（ゆうきそめい）らが、西洋的なリズムによる新しい日本画の創造を目指して結成した美術団体、无声会（むせいかい）への出展を開始した二〇歳前半の頃、千住近辺の隅田川の風景を題材にした作品を二点発表しています。

一点目は、『千住川』（現所蔵先不明）と題された作品で、明治三五（一九〇二）年、无声会の会員になったばかりの柏亭が、第五回无声会展に出展した五点の中の一点です。当時の出展カタログの図版から、遠くに千住大橋が見える隅田川沿岸の風景を南千住側から捉え、无声会の思

想に則って克明な写実性を持って描きあげた作品であったことが分かります。日本画の画材と水彩の技法を融合させたその表現は、同年の文芸雑誌『新声』（第七巻第五号）に掲載された展覧会評で「これも無論寫生に成つて居るので、なかなか傑作である。一昧君の描法は一種特有の點があつて、正に一新生面を開いて居るものだ」と評されているように、出展作中でも高い評価を受けました。

二点目は、翌年の第六回无声会展への出展作《千住川月夜》（現所蔵先不明）で、出展カタログの図版を参照すると、遠くに橋梁を望む隅田川の夜景を、やはり南千住側から捉えた作品と推測することができます。

この他、昭和九（一九三四）年に千寿第二尋常小学校で開催された「足立区名宝展覧会」の出展目録を見ると、《榛木山（はんのきやま）より大橋を望む》という、やはり南千住付近から千住大橋を描いたと思われるタイトルの持つ柏亭の作品が出展されていることが確認でき、柏亭が千住大橋を望む南千住近辺を、写生地および画題として好んでいたことが伺えるのです。

■柏亭から贈られた《椿図》 右のように、柏亭が南千住付近を写生地としてしばしば訪れていたであろうことは、その作品記録から明らかです。さらに、郷土博物館でお預かり

している資料中から確認された柏亭の筆による《椿図》は、柏亭が南千住のみならず、大橋を越えた足立の人物とも交友を結んでいたことを明確に物語るものでした。

《椿図》は、墨と淡彩による日本画で、左上部に「柏亭作」の署名と、本名の満吉の一字「満」の印章を確認することができます。明確な制作年代は不詳ですが、興味深いのは、「薄謝 石井柏亭」と書かれた巻紙と、紅白の水引が巻かれており、明らかに何らかの謝礼として柏亭から贈られたことを示している点です。これにより、区内の人物と柏亭との直接的な交友が示唆され、調査を進めたところ、花畑に住み、足立区立第十三中学校で英語教師をしていた千ヶ崎悌六が、柏亭に絵を学んでいたという情報もたらされ、悌六氏に対する本格的な調査への道筋が拓けることとなったのです。

そして、現在までの調査によって、悌六氏が旧制第二高校在学時から与謝野夫妻の『明星』に詩歌を寄稿し、以降、詩歌人兼編集者として、夫妻が『明星』に続いて主宰した文芸雑誌『冬柏』の編集・運営の中心を担うなど、夫妻の右腕としてその活動を支えていたことが明らかになってきました。悌六氏は、この与謝野夫妻の傍での活動を通して、夫妻の盟友だった柏亭に出会ったものと考え

られます。そしてその薫陶を受け、やがて水彩画家としての活動を本格化させていこととなりますが、《椿図》はそういった柏亭との交流の中で、悌六氏に贈られたものと考えられるのです。

■おわりに―足立の水彩画家たち― 《椿図》という一点の作品を契機として、詩画人・千ヶ崎悌六への調査は始まりでしたが、昭和二七（一九五二）年に刊行された『現代水彩画作品集 水彩特集』（美術研究社）所収「現代水彩作家氏名録」を見ると、

・丸山東美男（足立区伊興町前沼）

特別展「スイーツランドあたち」より

機械化以前の菓子づくりの道具

飴の切断機（球断機）

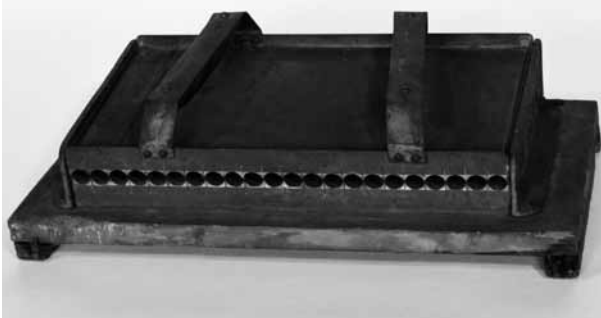
萩原 ちとせ

開催中の特別展では、食品工業としてのお菓子づくりの歩みを対象としています。機械化が進んでいるお菓子の製造も、昭和四〇年代の半ばころまで、ほとんど手作りでした。そのようななかで、いかに効率よく、たくさんのお菓子をつくるかを工夫した道具が使われていました。そのなかで、飴の切断機（写真）を紹介いたします。飴は銅鍋で砂糖や水飴を煮詰めたものからつくります。鍋から取

・岡田正二（足立区蒲原町）
・氏家秀之進（足立区北三谷）
・豊千里（足立区栗原町）
・豊田芳郎（足立区花畑）

と、悌六氏の他にも複数の水彩画家たちが足立に居を構えていたことがわかります。また、昭和二〇年頃には、中央画壇で活躍していた芸術家が、区内の学校に美術教員として勤めていた例も確認されています。今後、彼らへの調査を進めていくことで、江戸以来続く足立の芸術文化の、新たな一面を明らかにしていくことができるでしょう。

（郷土博物館 専門員）



り出したアメを練り、それを細長く棒状に伸ばします。伸ばしたアメを



餡の切断機(球断機)「FUJIKO」の会社マーク
一般財団法人東京菓子協会所蔵

一粒ずつに切り離すときに使うのがこの道具です。木製の盤に溝のついた金属製の板を取り付けてあります。溝の峰の部分は上下ともに、細かく尖った刃になっています。下の部分に、横幅に合わせて切ったアメを溝と垂直に並べて置き、上から抑えてグリグリと前後に動かすことによって、アメが切れ、また切れたアメが溝のなかで転がり丸い形になるのです。上部の持ち手が、軽くハの字に開いて掴みやすく工夫されています。使っていると、刃が減っていくので、のこぎりと同様に目立てをして手入れをします。

同じ仕組みの道具に、すべて木製で、溝幅の大きい球断機があります。こちらは、形の揃った丸い団子をきれいにつくるための道具で、現在でも菓子製造道具として販売されています。和菓子店で使われています。

須賀家旧蔵 奉納算額について

奥村 麻由美

団子の球断機がいつごろから使われているのか不明ですが、こちらが先にあり、固いアメを切るために金属、刃をつけた道具を開発したのではと想像されます。金属加工の技術は難しいので、古くても昭和一〇年代にできたものではと考えています。

東京菓子協会が所蔵するものと、区内マルマサ製菓から今回寄贈されたものと同じメカで、普及していた様子が想像できます。富士山に「FUJIKO (フジコー)」と筆記体で表した会社マークがついています。

こうした道具の使用体験がある人も少なくなっています。機械化直前の道具には、製造のための基本的な原理が表れています。道具の細かい使い方、そして開発や普及についてもさぐることができばと思います。

(郷土博物館 学芸員)

算額とは、和算の問題やその解法を記載し、寺社に奉納した絵馬の一種である。額面題などとも呼ばれ、今日まで各地に多く残されている。これらの額は問いと答えが一揃いの額もあれば、遺題と呼ばれ、問題だけを記載し、それを見た誰かが答えを求め、その解法やさらなる難題を

また記載して掲げるといったものも多い。

和算とは、広義でいえば日本独自に発達した算術の総称であり、長い歴史を持つが、ここでは特に江戸時代以降盛んになったものについて述べる。

江戸期における和算興隆のきっかけとして、寛永四年(一六二七)に吉田光由による『塵劫記(じんこうき)』の発行がある。『塵劫記』は基礎的な算術書だが、世間に変容迎された書物であった。当時は、生活レベルの向上に伴い、素養としての算術が庶民にも求められ始めていた。時世だったからである。後に和算の発展に大きく寄与し、関流の祖ともなった関孝和も、この本から学んだと言われている。

一方、和算家と呼ばれる和算の専門家もいたように、和算は絵や俳諧と同じく、芸道の一つでもあった。算額の題材になる和算とは、あくまでもその道を極めることへの道楽や修行といった興だったのである。当然ハイレベルな和算は全ての人が自在にできたものではなく、その「謎かけ」は、ある種の神性を帯びて考えられていた。故に、難問が解けた際には、神仏に感謝し、そして披露する意味も込めて寺社に額が奉納されていたのである。

さて、ここ足立の地域にも、多く



「須賀家 奉納算額」嘉永七年(当館蔵)

の和算家が存在した。金杉清三郎、大原利明、小泉伝蔵など、いずれも先に述べた関流の著名な和算家であり、算額も多数残されている。そのうちの、須賀邦慶による一点を紹介する。須賀は本郷の押田邦全に学び、伊興にその足跡が残る人物である。こちらの額がどこに奉納されていたものかは不明だが、嘉永七年(一八五四)に奉納されたとの記録が見える。

今有如圓帶直圓
内甲圓四個及
隔累圓容乙圓
二個只云不拘
累圓箇數末圓

徑若干甲圓徑
若干問乙圓徑
幾何

答依左術求乙圓徑

術曰置甲圓徑減末圓徑名子乘

甲圓徑開平方減子倍之得乙圓徑

合問

關流

押田邦全先生門人

嘉永七甲寅羊正月吉日 須賀三治郎

邦慶

(※旧字体は一部を新字体で表記)

これは、図において末円の直径と甲円の直径を利用して、乙の円の直径を示せ、という内容の問題である。

解によると、三平方の定理を利用した、今で言う高等学校教育のレベル程度の数学だったことが伺える。言葉は少々難しいが、今日の数学(洋算)と理論は同じである。

このように、当時から高い水準であった和算だが、これからの発達には、生活水準の変化や、遊算家などの活動、天文学、測量技術の向上等、あらゆる要因があった。また算額は、都市部の知識人だけでなく、地方の村落や、農民の手によるものも多い。江戸期という太平の世で様々な文化や技術が大成されていったのと同じく、社会経済の発達により、和算の

発展も促された時代背景が伺える。ここ足立においての算額研究も、その内容だけでなく、地域の信仰や文化交流の側面からも考えてみる必要があるだろう。

(郷土博物館 専門員)

資料紹介

千住警衛と天狗党の乱 ①

多田文夫

幕末の文久三(一八六三)年、生麦事件や八月十八日に京都で政変が起こる中、江戸も厳戒態勢が敷かれ、千住宿をはじめとする江戸四宿には警衛が設置されることとなりました。警衛とは「御警衛」「非常警衛」とも称され江戸を防衛するための幕府軍の部隊駐屯と柵門(関所)をさします。

千住宿は出羽松山藩が八月二十六日に受命し、のち近江宮川藩が十二月十六日に命じられ、両藩兵が駐屯しました。この警衛については千住五丁目に関所があったこと、警衛をとめた大名について知られていました(「幕末が生んだ遺産」当館、平成十六・二〇〇四年)。

その詳細については不明だったのですが、最近、歴史家・阿部正巳(一八七九〜一八四六)による尊攘派の出羽松山藩士、川俣茂七郎(一八三九〜六四)の伝記、『川俣茂



七郎」(大正十四・一九二五年発行、私家版。国会図書館蔵)に、同警衛の記事が確認できましたので以下に記事を紹介いたします。

千住口の警衛は、近時幕府にて江戸の周囲に新たに設けたるもの、一にして、松山藩にては、江州宮川藩と共に文久三年十二月十六日に命ぜられ、千住安養寺に本陣を置き、宮川藩と十日交代にて勤番し、水戸口、流山口、奥州街道の警衛に当れるものなり。

阿部は両藩の受命日を十二月十六日としていますが、上述のとおり松山藩は八月に最初に受命してました。興味深いのは後半で屯所の本陣が「千住安養寺」とあり(安養院の誤記)、千住五丁目の安養院だったことが記されています(右掲写真)。さらに警衛の守備範囲が「水戸口」

(水戸佐倉道)、「流山口」(大原道)、そして「奥州街道」(日光奥州道中)だったことが判ります。千住宿のみならず三方向からの街道筋の警備を考えるなら千住五丁目は格好の場所だったと言えるでしょう。

この千住警衛が最初に機能したのが天狗党の乱です。このことについて次回以降ご紹介いたします。

※ 安養院が幕末の千住警衛の屯所本陣だったことについて、同寺内藤良家御住職にご協力をたまりました。記して御礼申し上げます。(郷土博物館 学芸員)

お知らせ 酒合戦再現!

前号紹介の千住の酒合戦二〇〇周年を記念して千住仲組協議会(会長・山田友計氏)が主催で次の日程で復元催事が行われます。どうぞご参加下さい。

- ▼開催日 十一月二二日(日) / 会場 東京藝術センター(足立区千住一丁目4-1)
- ▼講演会 午後1時〜1時45分 / 講師 安藤義雄氏(足立史談会)

「200周年を迎えた千住の酒合戦」

▼酒合戦再現イベント 午後2時〜3時30分。その他にも展示やイベントがあります。